

不思議な夢・話

石井龍生



第一章

ショート・ショート

全・十編

第二章

短編小説

全・七編

第三章

時代小説

青の洞門物語

## 第一章

彼の世を覗いて来た少年	8
お葬式	11
村のお産婆さん	14
死人からの手紙	17
人魂を見た少年	19
不思議な再会	22
電車での出来事	27
インコのお手柄	33
お人好し	37
猫になった女	41

## 第二章

一杯の玉露	46
二人の秘密	54
涙を流す鏡	69
予知能力	76
チェンジオフ	84
夢と現実	106
不思議な夢	112

## 第二章

青の洞門物語……………

124

この物語は、大分県中津市本耶馬溪町にある「青の洞門」の逸話を参考にして、ストーリーは歴史的事実とは異なりあくまでも創作である。すでに「恩讐の彼方に」という「青の洞門」の逸話を基に書かれた菊池寛の有名な小説があるが、「青の洞門物語」は「恩讐の彼方に」を現代風にアレンジしているが結末をはじめその物語とは異なることをまず申し上げておきたい。

本耶馬溪町は、福沢諭吉の故郷としても名高く、また、諭吉が木の乱伐によって美しい競秀峰（青の洞門）一帯の風景が壊されていくのを嘆き、それを防ぎ、保存するために一帯を三年がかりで買収したことも有名である。江戸後期の儒学者・頼山陽が耶馬溪は「天下に比べるものなし」と称えたほどの名勝でもある。（この小説に出てくる主人公僧仁海とは、史実では僧禅海のことである）

第一章

シヨート・シヨート



倉富 睦夫 画

## 彼の世を覗いて来た少年

松村家は江戸時代より続く造酒屋である。仏間には田能村竹田の絵が飾られている。その部屋に次男の幸次が病に臥せていた。彼は熱に浮かされながら夢を見た。竹田の絵の中に入り込み絵の中にある道を、奥へ奥へと歩いていた。自分の意思ではなく、何か不思議な力で引き寄せられていく感じであった。暫く歩いていると、幅十間程の川があり立派な橋が架かっていた。橋の向こうを見ると綺麗な花がいっぱい咲き乱れ、魅力的な花園のように見えた。彼は橋を渡ろうと足を一步踏み出した。その時、

「坊ちゃん、この橋を渡るのはよしなさい」

と言う声が聞こえた。後ろを振り返って声の方向を見ると、近くの田圃を手入れしている中年の男性が口を大きく開け幸次に訴えていた。彼はここまで来てあの魅力的な花園を知ったからには、ぜひ近くに行って見てみたいという思いに駆られて歩を進めた。するとその人が、



「あなたは後悔しますよ。まだ若い人が行くところではありません」

と、声を張り上げ幾度も繰り返します。彼はさすがにこの言葉を聞いて立ち止まりました。すると橋の向こうから

「坊ちゃん早くいらつしやい」

と言う白装束に身を固めた、年輩の女の人の声が聞こえてきました。幸次は男性の声にもう一度耳を傾けました。

「あなたは若い、まだまだ花園に行くのは早すぎます」

と言うのです。橋の向こうに行くには年齢制限があるのだろうか。彼は迷いに迷っていました。見近な人の声を信じることにしました。すると川向こうに居た女性が橋を渡り追ってくるのです。

「捕まると大変なことになります。早く逃げなさい」

彼は訳が分からないままに、来た道を引き返しました。息を切らし切らしやつと我が家に付いた時、夢が覚めました。

幸次が臥せている枕元に、いつの間にか両親がいて心配そうな顔をしていました。

「先生、幸次が意識を取り戻したようです」

父親がそう言っているようです。

「幸次、幸次お母さんだよ。分かるかい」

心配そうに母親が叫んでいます。何時来たのか医者が幸次の手を取り、顔を覗き込んで

「もう大丈夫です。薬を取りに来てください」

と言っています。

「本当に有難うございました。あまりの高熱で一時は助からないのではないかと思つたくらいです」

両親は揃って先生にお礼を言っています。幸次はどうやら彼の世を覗いてきたらしいのです。